

ソローキンにみる高度に都市化した社会の将来、および、出生力研究と人口還流研究の位置-過疎農山村研究における2つの重要課題をめぐって-

県立広島大学 山本努

Sorokin, P. A. and C. C. Zimmerman (1926 p.628-636) は高度に都市化した社会の将来を予測して、以下のようにいう。「超都市化した社会の将来はどのようになるか、……。その答えは、その高度に都市化した社会が……。農村的脊地を有するか、あるいは農村的脊地を有しないかによる事が大きい」。そして、その「農村的脊地」が充分にある場合には問題はないが、「もしも農村的脊地が少な過ぎるならば、……。しかも農村地域が半農半都市化 (rurbanized) されているならば、このような社会の安定性は著しく危険である」。「非常に都市化して十分な農村的脊地をもたない社会 (a highly urbanized society with an insufficient rural hinterland) は長くかつ具合良く存続できるか非常に疑わしい」。

その理由は、「都市化した地域は、その社会の増大をもたらす事ができない程、出生率が非常に低くなりがちである。また、僅かな農村的脊地は既にかなり半農半都市化 (rurbanized) しているのでまた出生率が非常に低くなりがちである」からである。このような状態においては、「その社会は純粹に人口が停滞するようになるか又はそれよりもこちらが事実に近いのであるが規則的に人口が減少するようになる。その結果徐々にあるいは急激にその社会は死滅する」。

ここにあるのは、まさに現代の日本社会の姿と思われる。本報告では過疎農山村研究の課題について検討するが、ソローキンの予測 (問題提起) は問題の枠組みを考えるにあたり、非常に適切であったように思う。現代の過疎農山村地域はまさに大きく都市化が進み、日本社会でも半農半都市化の事態がある (山本 1998)。そしてそこに見られるのは、「都市社会は死滅しつつある消費社会である」と指摘された都市の超低出生率 (鈴木 2001)、および、過疎地域での少子型過疎 (山本 2013 ; 山本 1996) の同時進行である。増田 (2013) の「極点社会」(「人口のブラックホール現象」+「地方消滅」) もまさに、Sorokin の予測した事態である。

その現実に対応して、過疎農山村研究の二つの重要課題として高出生率 (地域) 研究 (徳野 2013) と人口還流研究 (山本 2013) を示す。出生と還流 (流入) は、地域人口の自然動態、社会動態の一部であり、地域の土台である。現代の過疎農山村では地域人口の土台がまさに問われている。これは現代の過疎が地域人口の全年齢階層での総体的人口減少 (「高齢者減少」型過疎、「消える村」) の段階 (山本 2013 ; 山本・高野 2013) に入ったことに対応する問題である。

(参考文献)

- 増田寛也+人口問題研究会 (2013) 「2040年、地方消滅。「極点社会」が到来する」『中央公論』12月号。
Sorokin, P. A. and C. C. Zimmerman (1926) *Principles of Rural-Urban Sociology*,
鈴木広 (2001) 「アーバニズム論の現代的位相」『都市化とコミュニティの社会学』ミネルヴァ書房。
徳野貞雄 (2014) 「南西諸島の高出生率にみる生活の充足のあり方」『家族・集落・女性の底力』農文協。
山本努 (1996) 『現代過疎問題の研究』恒星社厚生閣。
山本努 (1998) 「過疎農山村研究の新しい課題と生活構造分析」『現代農山村の社会分析』学文社。
山本努 (2013) 『人口還流 (Uターン) と過疎農山村の社会学』学文社。
山本努、高野和良 (2013) 「過疎の新しい段階と地域生活構造の変容」『年報村落社会研究』49